

優秀賞

万博から学ぶ和歌山の未来の在り方

和歌山県立向陽高等学校 一年

岩崎 太智

初夏の頃、私は初めて万博というものに行つてきました。テレビで何度も見ていましたが、実際に会場に着くと、そのスケールの大きさに驚きました。最初に目に入ったものは「大屋根リング」と呼ばれる巨大な屋根でした。陽光が差し込み、宙を舞うような気分になれるその通路は、とても気持ちが良く、まさに「未来の広場」と言わざるを得ませんでした。多くの人が写真を撮つていて、私も家族と一緒に記念撮影をしました。

まず最初に入つたのは「日本館」です。日本館では、未来社会について「人と自然の共生」を題材に紹介していました。スクリーンいっぱいに映し出される映像や、音や光を使った演出は圧巻でした。中でも、エネルギーや食料を無駄にせず、自然と調和しながら共に生きる社会のイメージが印象に残りました。今の生活より地球にやさしい持続可能な社会はすぐそこに迫つてきているのです。

次に訪れたのはアフリカの「マリ・バビリオン」です。ここでは、伝統的な仮面や楽器などが展示され、カラフルでとても活気に満ちていました。私はある一つの仮面に目が留まりました。お店の人が「これは昔から幸運を呼ぶマスクなんだよ。」と説明してくれたので、そのマスクをお土産として購入しました。木彫りの仮面は少し重たかつたですが、手にとると温もりがあり、遠い国の文化に触れられた気がしました。最後にお店の人と肩を組み、記念写真を撮りました。

夕方になり、お腹が空いてきたので「ベルギー館」に入りました。ベルギー館のレストランはお洒落で、窓から見える万博会場の夜景眺めながら食べるワッフルやムール貝を食べた時間は、一度しか味わうことのできない特別な時間でした。

万博には、未来の技術を紹介するパビリオンもありました。私は和歌山で生まれ育ったので、こうした技術を地元に活かせるのではないかと思いました。和歌山にはみかん、梅などおいしい果物が多くあります。一方、高齢化や人口減少など、課題もあります。ドローンやロボットを活用すれば、農作業の負担を減らし、環境に配慮した農業を広げたりできるのではないかと感じました。

また、万博会場では多くの国の人たちが交流していて、世界と「つながる」との大切さを感じました。私たち高校生もSNSを通じて、和歌山の魅力を世界中に発信することができます。

この万博での一日は、ただの観光ではなく、「未来を考える」時間になりました。この日体験したことのすべてが、これから

の社会について考え直すきっかけとなりました。

私はこの経験を通じて、和歌山の自然と未来の技術を結びつけ、持続可能な社会を創ることが大切だと感じました。そして、未来を創るのは大人だけでなく、私たち若い世代もその一員だと気づかされました。

これからも、和歌山の未来について、自分なりにできることを考え、少しづつ歩みを進めていきたいです。